

令和7年度 学校経営要綱

1 福島中学校区学校教育目標(9年間を見通した学校教育目標)

自らの考えをもち、共に学び合い、心豊かにたくましく未来を切り拓く児童生徒の育成

(1) 教育目標に込めた意味・内容

福島中学校区の子どもたちのよさを最大限に生かし、明るい未来の創造に向けて課題を解決していきけるように、「自らの将来をしっかりと見つめ、大いなる志(目標)を持って、その達成に向けて少しずつ、しかし着実に努力を重ねていくことができる児童生徒の育成を9年間で行っていきたい。」という明確な目標とビジョンを共有するべく、この学校教育目標を設定した。そして、小中一貫教育という「縦の絆」と家族や仲間そして地域の方々といった「横の絆」との中核にいる一人ひとりの児童生徒と今後もまっすぐに向き合い、ともに学びを続けていきたい。

(2) 教育目標設定の基盤

- ① 日本国憲法、教育基本法、学校教育法その他の関係諸法規の精神を尊重し、福岡県教育委員会、南筑後教育事務所及び八女市教育委員会の教育施策重点目標に示された事項に立脚する。
- ② 学校は「人間形成の場」と捉え、目の前の子どもたちの実態や社会の実態・変動等を鑑み子どもたちが現在及び未来をたくましく生きぬくことができる総合的な人間力を備えることができる教育活動の創造を行う。
- ③ 「福岡県学校教育振興プラン」に基づき、地域の伝統や文化を大切にしながら、学校・家庭・地域が一体となった教育活動の推進を行う。

(3) 9年間でめざす児童生徒像

- 目的意識・見通しをもって学習に取り組む児童生徒
- 自他の良さや違いを認め合い、支え合うことができる児童生徒

2 本校教育がめざす姿

めざす子ども像	【知育】 切磋琢磨し、自ら学ぶ意欲と知性を身につけた子ども 【徳育】 規則を尊重し、自他ともに大切にできる子ども 【体育】 目標をもち、ねばり強く体力づくりに取り組む子ども
めざす学校像	○ 学ぶ楽しさを味わえる学校 ○ あいさつや笑顔があふれる学校 ○ 保護者や地域と連携・協働し、地域に根ざす学校
めざす教師像	○ 厳しさと優しさをもった指導力のある教師 ○ 教育のプロとして自らを磨き、常に前進する教師 ○ 社会性を持ち、子どもや保護者・地域から信頼される教師
めざす地域像	○ 「自然と歴史と人々が共生し、笑顔とふれあいあふれるまちづくり」 ○ 小中一貫教育及びコミュニティー・スクールや地域学校協働活動による地域と一体となった教育活動の推進 ○ 相撲や伝統行事を通しての子どもの育成

3 学校経営の理念

- 地域の大樹であり、地域づくり・人づくりの中核である学校
・ 「地域と一体となった学校づくり」と「学校を核とした地域づくり」の実現
- 率先垂範・師弟同行の学校
・ 子どもに求めることは、すべて自らしてみせる、一緒に行く。
- 児童と職員がウェルビーイングのために自らを磨く学校
・ 本物(人・もの・こと)との出会いで人は大きく成長する。
- 「子ども本位」の指導によって「令和の日本型学校教育」を具現化する学校
・ 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実

4 学校経営の基本方針

- (1) 公教育の立場に立ち、校長を中心とした調和と統一のある学校経営に務めると共に、職員の主体性・結果責任・同僚性を発揮した効果的な学校経営を行う。
- (2) 学校・家庭・地域が連携・協働し、地域の特性を生かした教育により、ふるさとを愛し、未来社会の創り手になる人材の育成を図る。
- (3) 主体的・対話的で深い学びによって必要な資質・能力を育成し、「令和の日本型学校教育」の具現化及び児童と教員のウェルビーイングの実現を図る。
- (4) P D C A サイクルを確実に回し、継続的な評価改善に努めることによって、全職員で学校教育目標、中期重点目標、年度の重点目標の達成を目指す。

5 児童の実態

(1) 知育の面から

- R6全国学力・学習状況調査では、国語科においては、全国平均と比べ、「話すこと・聞くこと」の領域が「-7.4」、また「読むこと」についても「-6.4」となっており課題である。資質・能力としては、「思考力・判断力・表現力等」が「-4.6」となっている。算数科において「変化と関係」の領域が全国と比べ「-13.0」と差が大きかった。また、「思考力・表現力・判断力等」の資質・能力が全国と比べ「-5.0」となっており課題である。
- R6福岡県学力調査では、国語科の「思考力・判断力・表現力等」が全国平均と比べ、「-4.6」、算数科では、同資質・能力が「-8.0」となっており、課題である。

	県学力調査 (R6 第5学年)		全国学力状況調査 (R6 第6学年)	
	標準化得点 (県: 100)	C・D層の割合	標準化得点 (全国: 100)	C・D層の割合
国語	93.9	55.9%	94.5	51.8%
算数	88.3	53.4%	94.6	53.6%

東書標準学力調査 (R6) は、以下の結果であった。 ※全国平均との比較

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
国語	98.8	104.5	111.1	105.3	98.2	105.4
社会			108.0	115.0	86.2	120.0
算数	99.9	103.3	107.6	108.1	93.0	116.0
理科			99.7	107.5	101.4	104.8

本校においては、C・D層の割合の大きさから、個人差が拡大していること、「思考力・判断力・表現力等」の育成が不十分なことが課題となっている。

要因は以下のことだととらえている。

- ・主体的な学習が十分できておらず、受け身の姿勢で学習しているため、追究意欲が低い。
- ・自分の考えをもち、それを工夫して相手に伝えたり、他者の考えを聞いて考えを見直したりしてよりよい考えにすることが十分できていない。
- ・忍耐性、継続性が身についておらず、向上心をもって自らを高める意識が低い児童がいる。

これらは、非認知的能力に係ることであり、非認知的能力をいかに高めるかが課題となっている。

○ 非認知的能力に関して

〔R6全国学力・学習状況調査児童質問紙の結果〕

- ・質問項目「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか。」は、全国と比較して「当てはまらない」「どちらかといえば、当てはまらない」が5.2と上回っており、課題であった。
- ・「5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか。」について、「当てはまらない」「どちらかといえば、当てはまらない」が全国と比較して4.2と上回っており、課題であった。
- ・「授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にしてお互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか。」について「当てはまらない」「どちらかといえば、当てはまらない」が全国と比較して5.5と上回っており、課題であった。

〔R6第1回及び第2回非認知的能力に関する調査（ハ女市教育委員会）〕

- ・「質問⑦ 授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していますか。」について本校は、「どちらかと言えば発表していない」、「発表していない」、「考えを発表する機会はなかった」の合計が2回の調査とも30%以上となっており、工夫して発表することが大きな課題となっている。また、「質問⑥ 自分と違う意見について考えるのは楽しい。」についても「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」が20%以上を占めており、自他の意見の相違について考えさせることが課題と言える。

（2）徳育の面から

令和6年度は、重点目標の「目標をもってねばり強く取り組む子ども」をめざし、特に掃除指導に力を入れた。その結果、掃除を徹底して行う意識が芽生え、心の向上につながった。また、「いじめ防止」の視点から道徳教育を充実させたことで暴力・暴言が減った。しかし、挨拶に関しては以前よりも意欲が低下している。挨拶に関する課題として、児童同士で挨拶や地域の方への挨拶が十分できていないことがあげられる。よって、今年度は生活指導の中で挨拶を重点的に指導し、さらなる心の向上を図る必要があると考える。また、ここ数年、本校では不登校・不登校兆候の児童が増加傾向にあり、大きな課題となっている。集団生活になじめない児童がいることも要因の一つである。よって、個を大事にし、相手の気持ちを理解して協力し合ったり、助け合ったりする心情を育てていく必要がある。

（3）体育の面から

令和6年度の新体力テストで県及び全国平均を目立って下回ったのは、以下の種目、学年である。「筋力」「柔軟性」「跳躍力」に課題があると言える。また、同テストの5段階評価において、全学年の平均でD判定が21%、E判定13%と多く、個に応じた体力向上策がとることが課題である。

男 子		女 子	
握 力	1年、2年、3年、4年、5年、6年	握 力	1年、2年、3年、4年、5年、6年
長座体前屈	1年、2年、3年、4年、5年、6年	反復横とび	1年、2年、3年、4年、5年、6年
立ち幅とび	2年、3年、4年、5年	立ち幅とび	2年、3年、4年、5年、

6 本校の教育課題と経営課題

（1）教育課題

- ◎ 児童のウェルビーイングのために、非認知的能力の要素である「学びを調整する力」（「メタ認知」等）を向上させることと、自他の気持ちを大切に相互に理解し、協力し助け合うこと
- 目標を達成したりめあてを解決したりするために、考えを伝え合うことができるようにし、「思考力・判断力・表現力等」の資質・能力を高めること。
- 各学力調査におけるC・D層の児童に対して個に応じた指導を行い、基礎的・基本的な学習内容を確実に定着させること

（2）経営課題

- ◎ 職員のウェルビーイングのために、生徒指導の実践上の4つの視点に沿った指導力を高める具体策（共通実践事項等）を策定して実践し、効果を実感できるようにすること
- 校務の協働化と同僚性及び企画機能の向上
- いじめや不登校への組織的な対応の強化
- 学校・家庭・地域の共通理解と連携・協働による目標達成を目指した取組の充実
- 「働き方改革」に係る校務の効率化の推進

7 重点目標

(1) 中期重点目標

「課題を追究し続ける子ども」の育成

- 課題を追究するために、目標やめあてを持つことができる。
- 課題解決の見通しや計画を立てることができる。
- 目標の達成やめあての解決のために考えをしっかりとち、友だちと協働して、ねばり強く取り組むことができる。
- 解決結果や過程を振り返り、新たな課題や目標、めあてを持つことができる。

(2) 本年度の重点目標

「考えを伝え合って自分を高める子ども」の育成

「自分を高める」という言葉を入れた意味

・・・「非認知的能力」の要素である「学びを調整する力（メタ認知等）」を高めることを意識するため

【めざす子どもの姿】

〔知育〕 よく読み、よく聞き、よく書いて考えを伝え合う子ども

→ 学力向上プラン、主題研究、児童が学期ごとにつくるめあてに反映させる。

〔徳育〕 挨拶を大切にし、考えを伝え合いながら協力し合い・助け合う子ども

→ 道徳科の重点内容に反映させる。

→ 特別活動（学活、児童会活動、学校行事、クラブ活動等）に反映させる。

〔体育〕 考えを伝え合って体力を高める子ども

→ 体力向上プランに反映させる。

※ いずれも、「自分を高める」ための振り返りまで行うことができるようにする。

○ 重点目標の設定にあたって

令和6年度は、非認知的能力の「粘り強く挑戦する力」を高めるために、「目標をもってねばり強く取り組むこと」に重点を置いた指導を行った。今年度は、この上に立ち、非認知的能力の要素である「学びを調整する力（メタ認知等）」や「協調性」を高めるために、重点目標を設定した。このことは、教育課題の解決や中期重点目標及び福島中学校区学校教育目標の達成、ひいては児童のウェルビーイングの実現につながる。

(3) 重点目標の達成を見取る方法と目標値

○ 重点目標に係る児童・教職員・保護者アンケート： 四件法で平均3.1以上

〈評価項目〉

1 よく読み、よく聞き、よく書いて考えを伝え合う子ども

〔評価項目①〕 よく読み、よく聞き、よく書くことができたか。

〔評価項目②〕 考えをつくり、伝えることができたか。

〔評価項目③〕 自分の学習についてしっかりと振り返ることができたか。

2 挨拶を大切にし、考えを伝え合いながら協力し合い・助け合う子ども

〔評価項目①〕 挨拶の大切さを考え、元気にあいさつをすることができたか。

〔評価項目②〕 考えを伝え合いながら、友達と協力し合ったり、助け合ったりすることが

できたか。

3 考えを伝え合って体力を高める子ども

〔評価項目①〕 自分の体力を高めることができたか。

〔評価項目②〕 体育の学習で、考えを友達に伝えたり、友達の考えを聞いたりすることができたか。

- 単元末テスト : 75点以上の児童が8割以上
- 標準学力テスト : 全学年・全教科の正答率が全国平均以上
- 全国学力・学習状況調査(第6学年)、県学力調査(第5学年)、チャレンジテスト(第4学年)
: 全学年・全教科の正答率が全国・県平均以上
- 体力テスト、体育に関するアンケート : 体力テストが全国平均以上
: 体力向上プランの指標の達成(アンケート)

8 重点目標達成のための方策

(1) 学力向上

- 重点教科及び重点的に育成する資質・能力の設定
 - ・重点教科：国語科(「思考力・判断力・表現力等」の育成に重点を置く。)
 - ・学力向上のための主題研究(国語科で培った言語能力を他教科等に生かす)を実施する。
- 学力向上プラン
 - ・授業づくりの取組 → 重点目標に係る共通実践事項の明確化と短期での評価
 - ・学習基盤づくりの取組 → 「福島中学校区スタディ7」の徹底と自主的な家庭学習の充実

(2) 心の向上

- 道徳科における2つの重点内容の設定
 - ・重点目標に係る重点内容・・・全学年「希望と勇気、努力と強い意志」
 - ・いじめ防止の観点の重点内容・・・低学年：「友情、信頼」、中・高学年：「相互理解、寛容」
- 生活指導の共通理解と徹底・・・挨拶指導の仕方の工夫と全学級での徹底
・・・「福島中学校区 みんなで守る生活のきまり」「よい子のきまり」

(3) 体力向上

- 体力向上プラン 運動名「友達と伝え合って体力づくりをしよう！」の取組
 - ・体力テスト結果からみた課題(「筋力」「柔軟性」「跳躍力」の向上)の克服のための継続的な取組

(4) 特別活動(学級活動)

- 学級活動(特に学級会)の充実
 - ・学級会を実施する中で計画的な話し合いの仕方を習得させる(折り合いのつけさせ方等)

(5) 総合的な学習の時間

- 「ハ女ふる里学」やGTとの交流を通して地域への愛着を持たせる学習の充実
- 情報活用能力を身につけさせる学習活動の充実
 - ・全学年での計画的なプログラミング学習・情報モラル学習、効果的な他教科等との関連指導

(6) 外国語活動・外国語科

- 外国語を使って伝え合う活動の重視(中学校との指導の接続への留意)
 - ・外国語活動・・・外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませ、外国語で伝え合う力の素地を養う。
 - ・外国語科・・・外国語で自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。

(7) ICT教育の推進

- 電子黒板、デジタル教科書、タブレット端末等の有効活用
 - ・ICT指導員を活用した、情報活用能力を高める学習及び情報モラルを身につけさせる学習の充実
 - ・ICT活用プロジェクトが中心となって進めるICT活用指導力を高める職員研修の実施

9 本年度の経営の重点

- (1) 職員のウェルビーイングのために、生徒指導の実践上の4つの視点に沿った指導力を高める具体策（共通実践事項等）を策定して実践し、効果を実感できるようにするために

ボトムアップの形で生徒指導の実践上の4つの視点に沿った学級経営と学習指導（授業改善）に係る共通実践事項（特に授業展開の基盤となる教育技術）を設定し、「取組→評価」を確実に行之、効果を目に見える形にする。

○ 学級経営の共通実践事項

- ① 児童の自主的な活動や自主的な家庭学習の指導に重点を置く。
- ② 挨拶指導（特に友達どうしや地域の方への挨拶）に重点を置く。

○ 学習指導（授業改善）の共通実践事項

- ① 重点的に高める指導力量の設定（以下の2つ）とそのための主題研究の充実

- ・児童全員に確実に考えをもたせ、効果的に伝え合いをさせるための手立てを工夫する。
- ・学習後に子ども自身が自分の変化や成長を実感できる「振り返り」のさせ方を工夫したり、仕組みをつくったりする。

※ 研修部の主体性のもと、協議を十分行った上で重点教科国語科及びその他の教科等における共通実践事項を明確にした研究授業を実施する。

- ② 伝え合いを効果的にするための電子黒板（電子教科書）やタブレット等の活用

- (2) 校務の協働化と同僚性及び企画機能の向上のために、

職員一人一人の参画意識（役割と責任）の向上を図り、活動目標に沿って同僚性や企画機能を発揮する組織運営を行う。

【部長を中心とした「3部1プロジェクト」による機能的な組織運営】

- ① 学力向上部（学年代表からの構成）…〔定期的な組織活動〕
 - ・基礎学力向上部…基礎学力を高めるための取組の実施
 - ・授業改善部…授業改善を推進する取組の実施
- ② 心の向上部（学年代表からの構成）…〔定期的な組織活動〕
- ③ 体力向上部（学年代表からの構成）…〔定期的な組織活動〕
- ④ ICT活用プロジェクト（ICT担当者を中心とした学年代表者による組織活動）

※ 教頭と主幹教諭は、各部の取組や評価に対し適宜指導・助言を行い、改善を図る。

- (3) いじめ、不登校への組織的な対応の強化のために、

職員一人一人の人権感覚を高めるとともに、いじめと不登校対策の基本方針に基づいた計画的・組織的な取組（SC、SSW、関係団体との連携）を全職員の共通理解のもとに行う。

- (4) 学校・家庭・地域の共通理解と連携・協働による目標達成を目指した取組の充実のために、

福島中学校区における小中一貫教育の重点事項やコミュニティ・スクール等の意義や重要性、その内容を共通理解し、充実・促進を図る。

- (5) 「働き方改革」に係る校務の効率化の推進のために、

校務の効率化を図るため、業務の優先順位に配慮しながら、従来の取組・やり方を工夫したり取捨選択したりして時間を確保するとともに、ICT等を活用して職場環境の改善を行う。

10 教育課程編成の基本方針

(1) 通常学級における教育課程編成の基本方針

重点目標を達成するために、以下の方針で指導内容を選択・組織し、それに必要な授業時数を配当したり重点をはっきりさせたりすることによって、本校の特色ある教育課程を編成する。

- 学校教育目標及び今年度の重点目標「考えを伝え合って自分を高める子どもの育成」の達成をめざし、学習指導要領に示されている内容を確実に実施するとともに、地域の「ひと・もの・こと」を生かした子どもの「ワクワク感（知的好奇心）」や「学びを調整する力（非認知的能力）」を高める教育課程を編成する。
- 教科指導については、重点教科国語科を中心に言語活動を通して言語能力（読む、話す・聞く、書く）を高めることや、対話活動の中で他者とかかわり合いながら伝え合うことを通して、思考力・判断力・表現力等を高める授業を充実させる。また、ICTを活用して「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図る。
- 道徳教育については、道徳科において重点目標に係る重点内容といじめ防止の観点からの重点内容を設定し、他者と共によりよく生きていくことができる子どもを育成する。
- 総合的な学習の時間及び特別活動では、ふるさとを愛する心情をもたせるために、地域の方々との交流などの体験的活動を重視したり、地域教材（特に「八女ふる里学」）を積極的に活用したりして、子どもの学習に対する期待感を高める工夫をする。
- 特別活動においては、学級活動における「学級会」を重視し、「折り合い」をつける話し合いの仕方を学ばせる。また、挨拶指導に力を入れ、全学級で計画的に丁寧に指導・評価する。
- 教科等横断的な視点で各教科等を関連づけた学習内容を組み立て、全教職員でカリキュラム・マネジメントを行う。PDCAサイクルのうち、特に「C→A」に重点をおく。

(2) 特別支援学級における教育課程編成の基本方針

特別支援学級においては、児童一人一人の学習特性や実態に応じた個別の教育課程を編成することとする。その際、交流学級で指導した方が効果的な教科・内容等と特別支援学級で個別に指導した方が効果的な教科・内容を適切に判断し、編成する。

- 特別な教育的配慮のもと小学校に準じた教育を行うために、特別支援学校学習指導要領及び小学校学習指導要領を参考に、その子の実態に合った指導内容を抽出した独自の教育課程を編成する。
- 知的障がいや有する子どもには、日常生活の指導と生活単元学習を取り入れた教育課程を編成する。
- 子どもの障がいの特性に応じて自立活動を取り入れ、個々の特性から生じる困り感を改善・克服できるようにする。
- 自立活動については一人一人の児童の障がいの状態に応じて27項目の中から必要な内容を選択し、困り感を改善・克服できるようにする。
- 子どもたち一人一人の教育的ニーズや保護者の願いをもとに、個別の教育支援計画、個別の指導計画を作成し、指導にあたる。
- 集団の中で友だちと適切に関わる力を培うために、同学年の子どもとの日常的な交流をはじめ、子ども一人一人の実態に応じて、異学年の子どもとの交流の場を設定する。